



官版

語彙

卷九

ホ 2
4706
9



門ホ 2
號 4706
卷 9

明治十四年五月

語彙 伊之部



文部省編輯局



語彙卷九

伊部四

いな

あをらう 露の袂のぬきたらば物思ひなりと人もこそとめ
の松うさき 雨のふるもいあとのたまき

否あて イヤイヤあど云小同ト 宇忠これ
をいあもて云々いづらうあらん 拾玉雜下い
又物名 住吉の岡

いな

いふ、播磨ゆてい四寸以上をいふ、此魚諸國ゆき
稱を異小を併せくらちめの下小辨せり

魚名、くらめの下小注を○筑前ゆてい二年
のゆのを稱し、伊勢桑名ゆてい六寸許あつを

いな

いな おろせどろ

鳥名、古來詳小ある者あり人々別説を
構う一定せど鴎鴎又紅鶴鶴なりとも云ふ
鳴鶴といふ和泉式部があふ事をいふおろせどろのをいふ人をもこひ
ぢ小あといさうあといふ歌小據まるなり、といふ家隆が秋の

田の稻負鳥のこがき羽も木の葉催ま露やそひらんといふ小據まるあふ
其外猶數説あり 古今上 我門小稻おろせどろの鳴あべ小けさ吹風小鴈を
いな

語彙卷九

語彙卷九

○わとけのうま。ふねむ。○たあま。○まあくむ。

虫名、蝨斯小似る瘡尖り西角あらざり褐緑

○のねむ。○のなむ。○てうわう。
の二種あり、雄の長さ一寸許、雌の一寸より三四寸小及ぶ者あり、背後尾小至り、色赤し、飛時、内羽黄色ありて美あり、散木下くびわをくい

いなさ俗

東南の風

いなせ

いあひ稲あり、稲をいせと居所とせり、田舎のまああり、後世轉じてあらの事とせり

堀川院百首のあひのあせやをいせむ庭とせり
門田の稲のかりわいせけり

いなせ

否とも諾とも小同ト 後撰卷五あやの守りける女をいあともせりひとあてと申

けまひのあせともひひとあてとせり
うれ物の身を心ともせぬよ也り

いなせ 東京俗

風流たつて

いなだ俗。あくらだ
。むまぢ

魚名、海鱧の小あつものといふ
形状ありの下小注也

いなだき。いせだ

いせだ小同ト 神代紀上 纏其鬢髪乃腕
万三 伊奈太吉小きとめる玉ハ二つあり

あさかあつても君タ
あぢ

いなたの

いなびかりの下小注也
字鏡集 電タイ

いなつさが小

あつた。又介品小豊後小産する、づが小、毎蟹稻穂を銜むりのあること
といへり、是ハ古書の文小あへるが如し、きとど他國小ある事を聞ゆ、是
も亦別なるべし、夫廿九あつたのうり田のおる小をひちうり、いなつさ
かつた世とこそつたらん 神樂譜 藤波 安思波良田乃以名川支加仁乃也 和

螭蜺 海濱稻春
蟹之類也

いなづま。いなづまび
。いなづま

其秋の比大空のをりくひうるといふ稲妻
の義あり、稲の實のまろく小志をく、此光

あつたより名づく 六帖 秋の田のわのうへてらる
稲づまの光の間ゆも君どこひ

いなづまび

稲交の意あり、いなづま同ト 景行紀 猛
如雷電所向無前 和 電伊奈豆

いなびどろろ

いなびどろろ方の意あり 源御奉

いなぶ

バビカ

ジタイスルをいふあり 續紀 進母不知退母 不知止伊奈備奏撰集抄ハ

いなぶる

バビカ

いなぶる事とるるといなぶる心あるとるるといなぶる身あるとの給へり 住吉かいらのかとてまらぶ

いなぶ

衛門督のかとていなぶるをせの給へり今昔十四君の宜ふ事辞ふるまの非ぞ 兵部卿物語上この事いなびつまふれ人をすちがやや 平兼輔集子の

いなぶ

たのいのとせ命もとていなぶる老とされづつりあひ 乃作歌 夫三 いろく小門田のいふ吹と

いなぶ

だる風おあどろろ 拾遺別 我は宿くせのあとのいふ

いなぶ

むらさきめかあ 過めや○いふと野ハ播磨

いなぶ

の國小ある地名ありいなぶといふと重祿 枕詞ゆきのあ否の意あり

いなむ

シタイスル 又 不兼知の意あり 狭三えとをい

いなむ

いなむ袖をつゆけぬ 虫名のいなむの

いなむ

稲を損ふ虫あり 慶節 蝗

いなむ

いなむ 寝席の敷て寝る具あり 下小注

いなむ

いなむ 證歌枕詞の下小あり

いなむ

いなむ 稲の卧とて席小見立の形 釋紀 十六 稻

いなむ

いなむ 似敷席故云稲席 夫三 タつもの王とて田の

いなむ

いなむ 顯宗紀 伊難武廬野 伊難野 伊難野 伊難野

いなむ

いなむ 武思呂 一 武思呂 一 武思呂 一 武思呂 一 武思呂 一

いなむ

いなむ なる小ありて寝席皮といふ意のつゆけあり 方葉卷十一

いなむ

いなむ 八小伊奈宇之呂とあるの宇と年と通韻なきあり

梅の花さくらさくら 源 須磨のあ
ら 京をさくらさくら 時

いぬい

伊余之弊あもり也 古今序 いぬい 昔を今にあらはしむる也
古めて往か一方の意あり 万七 志ぶるもの
さだめありとるよるあまのりや

いぬ

いぬ 〇とく 〇とく
犬類の総名也 田 杉家犬等を兼て云り
雄略紀 是賊為水間君犬所噬死 万七 垣よ
ゆる大召さくらさくらとわらさる君青山の
葉さくらさくら馬やまの君

いぬ

十二支の戌をいぬ外の下併せ見るべし
拾遺物名 うまひつー まるとうのいぬ
草名のいぬえの下小注を 典藥式 香薷七斤
本和 香薷 和名 薷

いぬあらざら

虎杖の一種 小きものゆへに 高尺餘あり 山
地小生む 又近山路傍小多く生むる 二三
菜名 獨活の下小注を 菜類の
土當歸と別あり

いぬらと

尺の者へ 尋常虎杖の瘡小
あるものあり 〇蛇苺草

いぬえ

〇いぬあらざら 〇ちんねんさうちの
〇移むとあざら
開く 其花一邊小連り 薷刀の如し 大なる種の高一尺より 三四尺小至る 小
香薷の葉小く長く 牡荊の葉小似たり 大香薷の葉大なり 荏の如し
花小種ハ紫 大種ハ淡し 大小共實を結ぶ 其根枯るものなり 字 莠 犬食

いぬえ

本和 香薷 和名 薷
草名 荏 下小注を
本和 假蘇 和名 蘇 下小注を

いぬえび

草名 えびの
下小注を
狗を射る射術を習ふる法あり 射家三
箇の法式の一あり 東 於南庭有犬追物

いぬおふもの

若君御入輿 此 支 讀 岐 羽 林 殊 庶 幾 被 申 行 又 於 御 壺 有 犬 追 物
前 奥 州 相 公 羽 林 等 被 參 天 十 二 足 射 手 六 騎 也

いぬおもた

草名 おもたの
下小注を
草名 高さ一ニ尺 莖方小く 枝葉對生 葉
香薷の葉小似る 短く 毛少く 花紫蘇の如
く 淡紫 長さ三四寸の穂をあま 又白花あるものあり 此外 同類あり 形
小く 異あり とも 犬香薷と唱ふるもの 數種あり 〇爵床

いぬうらむ

〇七

吾 彙 考 九

しぬぎらう 莚前俗

木名、白楊の
下小注を

しぬぐも 俗

木名、枸棘の
下小注を

しぬぐら 和泉俗

草名、忍のこぐさの
下小注を

しぬぐさそら 俗

草名のぬがんどく
どく同く

しぬくも 俗 ○あをくも ○あまも
○からだも

樟の一種ありて大樹とあり、其葉ハ楸小似
く背稍白し、秋月實を結ぶ大さ豆の如く

しぬくぼ 俗

草名、つらつらの
下小注を

しぬぐら 俗

木名、柘の下
小注を

しぬくひ

狗を噬ありて観とまをりて増鏡九朝夕
好むくくして犬らひ田樂あをを愛しける

しぬげいとら 伊豫俗

草名、うまきくの
下小注を

しぬげやん 俗

木名、あんまきの
下小注を

しぬげう 俗 ○なべげう

鳥名、全身けり小同く頭小
勝ありのとりふ

しぬごせう 豊前俗

草名、うまきびの
下小注を

しぬごせう 土佐俗

草名、高陸の
下小注を

しぬごま 俗 ○ごまのき

近山小産する小木ありて、葉長三寸許、皺
紋あらく、邊緣小鋸齒あり、對生を葉を摘

ハ胡麻の如き臭氣あり、夏月梢頭小多の小白花簇り開くこと
莢蓬ふ似たり、秋月實熟して赤く ○土察樹

しぬごら 肥前俗

草名、忍のこぐさの
下小注を

しぬさのん 東國俗

草名、鹹草の
下小注を

しぬざら 俗 ○うまびざら

木名、葉櫻小似く花穂をあきくこと三寸餘白
色ありて下垂れ、後實を結ぶ椒の大さあり

醃藏ありて食べり 散木上
しぬ櫻ありてなたまきて引入るあり

しぬさど 俗

草名、しぬさどりの
下小注を

ちやきぬりぬりせのやふある程小
ひくひらのあはれ本和 紅草 細知

りぬたで

俗。おわたで

野生。辛味あり、食用は堪ざる蓼と云、
品類多し大ゆして長く、黒斑あるあり、秋

紅葉して観るべしりのあり
通しよりぬりぬり云々云々○馬蓼

りぬだら

大和俗

木名、刺楸の
下注を

りぬたぶ

俗

草名、りびの
下注を

りぬたんが

俗

木名、山胡椒の
下注を

りぬつげ

俗

木名、つげのきの
下注を

りぬつと

陸前仙臺俗

草名、きつとりの
下注を

りぬつら

紀伊熊野俗

草名、ちまのハカツラの
下注を

りぬつとれ

和泉俗

木名、福徳をもちの
下注を

りぬつとみ

若狭俗

草名、ちからまの
下注を

りぬとくさ

俗

○かりらどくさ ○まはらどくさ ○ちまどくさ
○とくさ ○ちまどくさ ○ちまどくさ ○ちまどくさ
○ちまどくさ ○ちまどくさ ○ちまどくさ ○ちまどくさ

形は、花の如くゆくと、大ゆして枝あり、又少く枝あるあり、年を経るに
長大に至る夏莖を出して花を開く、つらつらゆ似たり ○節々草 ○りは
へ麻黄といへるは是あり、
かつらゆとさの下見さる

りぬあし

俗

木名、猕猴桃の
下注を

りぬあし

美濃俗

木名、鹿梨の
下注を

りぬあつな

俗

葎の下
中注を

りぬあめさ

俗

草名、秋初あめさ、先ちて生れ、形色あり、
ちまどくさ似る、較肥味は少く劣き

りぬぬのびれ

俗

草名、布野小似る、脚長し、傘頭微
褐色を帯ぶ味苦く美あり

りぬのま

○ちまどくさ

あの一まの下の
注を以字 地菘

いぬのまうらね 近江(俗)

木名、へびのやらぎの
下注也

いぬのたまひ

犬のつごあう(和)犬宮(以叔乃
木也)

いぬのとれ

戌の時あり(天武紀)是夕昏時大星自東度
西(伊)々々の入相むうり小たえ入る又の日の戌

いぬのあんむん 北國(俗)

草名、白英の
下注也

いぬのまあひげ (俗)

山野濕地小生むる蒺藜類の草あり穂
の形いぬせせ(やう)小似たり

いぬのひげ (俗)

穀精草の類ありて、形状亦同、其穂ハ十
餘枝の萼中小白色の扁球あり是多くの

いぬのふざり (俗)

草名、葉爵棘小似て三分許、鋸齒あり葉間
淡紫の一花を開き、蒂中小青色の圓實二

顆を結ぶ
○婆々納

いぬのこごり 備後(俗)

草名、あまぎの
下注也

いぬのまね (俗)

胡枝子の一種ありて原野小生む、莖高二尺許
葉とぎ小似る厚く、莖葉共小毛茸あり秋

いぬたさこ (俗)

いぬまうらね
同ト

いぬむらり

城築地をどの外小少ありあはする處ありを云
新六(く)つをそふやぶまつのぢの犬むらり

いぬたさこ

いぬたさこ

いぬたさこ

いぬたさこ

いぬたさこ

いぬたさこ

和狗蠅一名、
犬蠅(著於犬)

いぬたさこ 伊豫(俗)

いぬたさこ (俗) 〇いぬたさこ

うぐひまのさるがねの
下注也
近古の俗例、婚禮の式小見誕生の式小用お
る具あり、面を児童の如く作り其體の固る

實を結ぶ、上小緑の圓實あり下小紅の擔實あり人形に似たり○羅漢松

いぬむらじ俗

草名こまざうむらじの下小注を

いぬやれ俗 筑前俗

木名膽八樹の下小注を

いぬあつう俗

櫛の一種蒂赤うらさるりの下小注を

いぬゆう俗

草名お小やりの下小注を

いぬよめ俗

草名齒藻の下小注を

いぬよめ俗

草名卷藤の下小注を

いぬよめ俗

草名ひれよめの下小注を

いぬ加三列列細

行はあちど、又物の過ぐる事をもいふ万六まの原ら小の都にあまふたり大まや人の

かへうのめまが又ハのうてととの固べのあてこの花ふさたをい貫之集ゆく月日川の持將去寧樂ひとのため伊上河内へのゆるがやめ

水もあらあふ流るるごとものぬる年かか源若紫りぬる十よ日のやどあうとらとやと中煩ひ侍るを

いぬ和列列列

移むるゆわたり源若紫かふる朝霧を知らるのぬるものう後撰夏卯花のまける根根

の月清とゆゆきけとやあくやとぎま唐物語楊貴妃たらのゆゆきけ

いぬ俗 ○らま

鵬一種あり遍身鷲に似る尾の本白く末黒く老たると頭より尾まで灰白と灰黒との斑あり

いぬ俗

路傍陰地小生ゆる羊齒の類あり一株小叢生を其葉細小分裂あり柔あり蔽の類

小あらを食ふをうらぎ○倒掛草本和狗脊於介和良比字狗脊大山和良比又○本草和名字鏡等狗脊ありととる者い此のぬらびありとれと狗脊とい別あり

いぬ俗

戊亥あり神功紀西北有山字後藤この屋のいぬのまのうらや慶節乾

いぬ俗 ○おやるんあめ

櫛の一種葉形大あり紫藤の如く厚く葉の面白く粉を帯たり夏穂を出し

て花を開く黄色あり○櫻槐

いぬ和泉俗

草名まがめのるんどうの下小注を

い 稲 ○とまゝの○とまゝ

草名人世に必用ある一種の禾本ありて葉細く長し、莖の高さ三四尺、莖頭の花穂を生ぜ、長七八寸、穀を結ぶこと多きものなり、一穂中二百餘粒あり、此莖葉を交互に乾し、そのものを藁とて、此草毎年春月種を下し、夏月秧を水田に挿し、又瘠地にて、春月種を肥糞に交へ、直水田にうくることあり、秋月穀を収む、之を米とて、又陸生の者あり、早稲とて、苗の早中晩の三種あり、又芒の有無、穂の色、米の大小等あり、種々分ちて、數百種に分ち、雖も概して、小梗糯の二品に分出で、(○)稻記上、故、明、殺、神、於、三、目、生、稻、種、袖代紀上、以粟稗麥豆爲陸田種子、以稻爲水田種子、(○)伊、祢、つ、け、を、か、ぐる、ま、つ、く、を、こ、よ、ひ、な、う、と、の、こ、ろ、こ、ろ、と、り、て、あ、が、か、ん、拾遺雜歌、か、う、く、や、を、山田の、り、稲、を、や、い、び、で、守、る、か、う、や、の、よ、い、ぬ、らん

い 稲うららー 播磨(俗) 虫名のあごまうの 下小注を

い 稲きび (俗) 穀名、稷の 下小注を

い 稲こね (俗) りなこねの 下小注を

い 稲がて 寝がたをいふ(續後秋中)終夜庵の賤の秋の田のり稲がての月やこららん

い 稲つれろ

大嘗會の神供の稻をつく時うたふ歌あり(祭日薩曼)悠紀のわたのり稲つれ歌(新古賀)大

嘗會悠紀歌奉りける小稻春歌(千載賀)大嘗會の主基方の稲つれろ

い 稲つれろ 〇ぎせ〇たわろ〇ぎりちよう〇きりねせ〇うりい〇きりぐせ

〇うりま〇ぎらちよ 虫名、原野の多く生む蠱蝨の類あり、緑色褐色の二品あり、褐あるもの、聲高し、五月より鳴聲ギーヌチヨと

聞えそ、機箴を鳴きぞ如し、緑あるもの、聲低し、褐色の者を。あづら。あづらぎのちよう、〇やんぎのちよう。あづらぎ。緑色の者を。やぶぎの

ちよう。〇又蝨斯(和)蝨斯(漢語)豆木古万品

い 稲つむ (俗) 寝るをいふ(歳首の祝詞あり)

い 稲む (俗) 虫名、いあごまうの 下小注を

い 稲のよね (俗) 稲の實をいふ(醫心)稻米(和)稲(和)心(和)稻(和)米(和)稲(和)米(和)稲(和)米(和)

い 稲やぶれ (俗) 草名、かやちやあまかやの 下小注を

いのらふ

ロルレレ

他小 イラレル

いのらふ

ロルレレ

我がねのづから
イラレル

いのま

列列列

いのり

万十三 天地のかまきりもこれに禱てきこひてふのたまきくやまきけり 又
あらしふりかまの伊能利つまめらるる小とまの來あしと
枕ハ三昧堂たぐ 宵曉ふりのりもたる人 中務集 老ぬくもあや行さぬの
のらるる千とせよあもりのきの松原 六帖 深たもりののきるぬの思ひ
とがねむけの道の
神やまらるる

いと

いとわ小同ト 皇極紀 于時 有童謠曰 伊波
能杯 徐古 佐屢 渠梅野 俱渠梅多 徐母 古今 卷一

種一あまが岩ゆる松ハ生ゆけり戀
こひのあまらめやハ 和磐 以和名 大石也

いと

網小附る
鏝あり

いと

射場ありのむはのめの條
あませ見るべし

いのあぢや

○のくこまか ○のさあぢや
○た小あぢや

小木高一二尺、葉あぢや
小似く對生也、夏月莖梢

小四瓣の白花を開く六七分、
形木瓜小似たり、

いのあらひ

鳥名のこらう小
同ト

いのらご

草名、のこきんむの
下小注也

いのづる

草名、まべりひの
下小注也

いのわさ

粧妝の崑石の如く造り
たるものなり

いのおもだう

○と死のおもだう 石草の一種、深山小生也、葉三出ゆり
其形稍慈姑葉小似たり

いのかうま

○やまかうま 草名、小香薷の巖石の上小生ト、瘠て
○ひめかうま 小あまりのものなり ○石香薷

いのかご

○あごごわごれ ○ちやせんきう 草名、葉虎耳草小似て、硬く背
○よめのきう 紅紫色、冬を經く枯色を春月

莖と抽て十餘花附く、淡紅色筒状ゆりて剪刻深く
茶筌小似たり、故小加賀ゆりちやせんきうなり

いそぐれぬま

いそぐれあち

いそぐらま

いそがくる 元川

生給 美保止被焼 石隠坐

いそかげ

いそがさ 下野日光俗

三十攢り開きて
小毬とあそ

いそがし 俗

いそかせ 音

次條小同ト 方士 青山の石垣沼間のまぐさ

り小戀やまぐさらんあふよとあま

巖の垣のまぐさ、まぐさたる淵と云ふ 方ニ

かたろひの盤垣淵のまぐさのまぐさひつ、あま小

巖かげゆかまぐさのまぐさ 新六 あとたゆる山

橋の巖がまぐさのまぐさをあまの人もあし

貴人のみまかり給ふとゆふ石がまぐさの中小

ゆふまき給ふよとあま 祝詞式 鎮火祭 火結神

巖の陰あま 方四 ねくやまの磐影ふあま

まぐさのねのゆまぐさるまぐさもあまのまぐさ

准木名麻葉繡毬の一種ゆふ、高二三尺葉

稍菊小似る小く花白色ゆふ一莖上小二

草名、いこのかまゆ

同ト

醫の道と教授くる人といふ官名ゆふ 醫博

士あり博士と古來ともかせと訓るの轉音と

用わ あり注 へちまの條小あり 職負令 醫博士

いそか 俗

いそかつら 上野俗

いそかど

とら かざらうらへ ぐあわゆるあまのいそかど 源々霧 うらまこひ

いそかど

いそが糸 紀伊俗

いそが糸 俗 やまのつひ

いそが糸 あ

いそが糸 俗

草名、かあびきまぐさの

いとかんしゅ (俗)

石名からせいの
下注

いとからし (俗)

藤繡毬一種深山小生む葉邊の
鋸齒甚小あり

いとさき (俗)

巖と木とゆく非情の物とゆふ
万四か
むかへ戀つゝあらむが石木ゆかちりま

物をこものまひびして又五伊波紀より
あうし〜人うあぢぢのらまき糸

いとさき (俗)

女貞の一種葉圓あして厚く
硬きものあり

いとさき 九洲 (俗)

石名からせいの
下注

いとさき (俗)

磐城國より産する
一種の半紙あり

いとさき (俗)

草名ひぢぢきゆうの一種
高山上小生るものあり

いとさき (俗)

草名のせまあびの
下注

いとさき (俗)

草名のこまきぎくの
下注

いとまき (俗)

鳥名のいとまき
おあ

いとまき (俗)

草名深山石上小生むる小草あして形蛇
小似る蔓花黄色あして小あり

いとまき (俗)

草名讃岐のや谷の産あして葉形さつらさう
小似る纖毛あり夏月莖を抽くと二三寸

ゆして數花附く一筒五出淡紫色あして
形亦稍きくらさう小似る

いとまき (俗)

延言あり竹かやひの翁小
此歌いある人のいとまき柿の本

の人丸が歌あり 工佐舟君のいとまき
又わぢとり舟こども小いとまき

いとまき (俗)

謂ある意あき此品ありイハクあり
彼人のイハクありあどり

いとまき (俗)

鳥名わくわくろ小似る大あり
頭灰色背紫褐の文あり翎

黒白文交う翅黒く端
赤褐色尾も亦同し

いとまき (俗)

草名のまのういの下注
本和石草 和名云一名

しんせふらね

橡樟松而噴
風如葉

天のしんせふらねは神代の船あり神代紀上
次生蛭兒雖已三歳脚猶不立故載之天盤

しんせらり

草名まきあひらのしんせらりの下小注也
本和石斛和名類考此古乃久
預称一名以波久須利

しんせらり

草名卷栢の下小注也
以字卷栢ケリ

しんせらり

草名深山石上小生
葉扁栢の如く

しんせらり

て薄く繁密莖上を廻り着く年久きもの高さ
一二尺小至る本和卷栢云云和名伊波久美
名伊波古

しんせらり

草名のうのういの下小注也
和石韋和名云云一
以波久美

しんせらり

夏の雲をり物稱夏雲
播磨めて岩と云ふ

しんせらり

仁徳紀以播區娜輸伽之古俱等望○高山
の巖根の崩落ぬべ兒まよふの恐き物也

しんせらり
枕詞と

しんせらり

皇孫の天小わらり高御座をり
神代紀下皇孫乃離天磐座天磐座此云阿且排
麻能以鏡輝羅

分天ハ重雲稜威之道別々々々而
放天之ハ重雲乎伊頭千別
千別

しんせらり

鳥名啄木鳥の一種深山小産するものあり
り大さ繡眼兒の如く全身深緑色頂及び

腹小紅毛
あり

しんせらり

海邊小生さる一種の
菊ありて葉小く厚く

葉背白し高尺許七八月
小黄花攢り開く

しんせらり

草名六月菫の一種短小の者ゆへ
高五寸許花小紅白の二種あり

しんせらり

草名のうのういの下小注也
本和卷栢和名云云一名
伊波古

しんせらり

草名のうのういの
下小注也

しんせらり

琴柱の絃を受るとしんせらりをり十訓上ありと
ちのしんせらりのあたる處をりしんせらりを申小

よつて思ひよられ
けり

しそこまぢげ

もひぞまぢる一云三諸
山之石小管

しそこんぢあう(俗)

あんぢあうの
下注せ

しそこち

草名、卷楮の下注せ

しそさか

吾孫奉
齋矣

神を祭る地をいふ神代紀上高皇産靈尊因
勅曰吾則起樹天津神籬及天津磐境當爲

しそさ丸

巖の出嶺をいふ新六三山川のおちよふとら
の巖まぢるよとどめる水のまぢる

しそぢいさ(俗)

草名、深山陰地或は巖壁に生ずる一種のさ
くらまぢふして花葉亦相似く短小あり

しそぢいさ(俗)

鳥名のまぢる
中同ト

しそぢいさ(俗)

鳥名、たれまぢるの
下注せ

しそし

草名、いものうらの下注せ
本和石葺和名云云
云以波之

しそしは(筑前俗)

石名、からまぢるの
下注せ

しそしあう(俗)

草名、しそしあうの
下注せ

しそしあ

葦の異名八雲御抄とれあぬ
まぢるひのまぢるまぢる

しそまぢ

齋、鋤小同ト八雲御抄大嘗會の云々
のまぢるまぢるの物あり

しそまぢ(俗)

草名、石三稜の一種、山中石間、小生、トク形
小く葉細きものをいふ

しそまぢ(俗)

鳥名、しそまぢの
同ト

しそまぢ

石のうへを水のまぢみ流るるをいふなり
新古春上しそまぢなるひのうへのまぢるひの

めえつら春水
成ゆるかぢ

いとしむね (俗)

鳥名のいとしむね

いとしつら (俗)

石名のいとしつら

いとしがら (俗)

石の異名あり新勅意 つまみきのたのみの
あうと吉野川のいとしがらをいとしがらと云ふ波

續古今 吉野川龍つら風わらわら

いとしごぎ (俗)

草名のいとしごぎ

いとしご (俗)

草名石斛の
下注せ

いとしと (俗)

巖の平あま床に似たるをいとしと云ふ又人と葬る
たる墓所ともいふ方 檜の穂に夜の霜落

磐床と川の氷凝り又土石床のゆるり

いとしとら (俗)

鳥名のいとしとらの
下注せ

いとしな (俗)

草名のいとしな
下注せ

いとしな (俗)

魚名諸國の溪澗に産し巖穴に多し形鱗
小似く小く白色ゆへに油脂多し

いとしな (俗)

草名のいとしな
下注せ

いとしわ (俗)

不言の延言あり方古 あかしのとひのかう
らみ出るゆへにあまたいとしわを伊波奈久小

いとしわ (俗)

小灌木富士日光等の高山に生じ高
さ梢二三寸地を敷く密生し葉小

似て對生し實の大き南天の如く秋月紅熟を食ふべし越橋御湯殿記
永禄二年四月十八日萬里小路大納言よりいとしわ一ふさあわす永正何曾合ろはは

盆子巖葉子 尺素往來覆

いとしあ (俗)

草名碎米薺の一種深山石間に生じ
形小ゆへに高さ四五寸あり

いとしあん (俗)

小灌木あり伊豆及び箱根等の山陰溪崖
に生じ葉の南天燭の葉小似て互生し冬

月萎もむ夏月葉間より花穂と出二三の白花と
下垂し開く其形稍黄精の花小似し

いとしあ (俗)

介名蓼螺の一種大さ
拇指頭の如く外面黒

く疣多し肉黄赤
色至る辛し

いそぬいろ

八重さく山吹のいろぬ色さ
ある人もあ

黄の異名、梅子の色と口無し、わりのひきけて
言ぬとりの意あり 新古 雜上 九重ゆあ

いそ祿

物と祝詞式 大枝 語問志磐根樹立 伊 巖根ふとかさある山
戀つてあふと高山の盤根一巻てああは

巖ゆく根の添る辞あり 万 かくむわ
戀つてあふと高山の盤根一巻てああは

いそ祿かき

俗 〇ようつこかき

木名、槭の一種ゆき、日光及水曾等の山
中小産也、葉大ゆて缺刻浅し

いそ祿ふ

巖の異名、莫傳抄 いそ祿と折る山路の
かきとや家づと多きとびあ

いそぬいろ

巖の蔭道あり 古今 雜下 ようつこかきと
ゆきとあふと高山の盤根一巻てああは

いそぬいろ

〇いそぬいろ 〇いそぬいろ 〇いそぬいろ
〇いそぬいろ 〇いそぬいろ 〇いそぬいろ

草名、山陰の古木石上
等小生むる、羊齒類

根長く蔓延し、處々小葉と出せ、潤寸餘長六七寸、勁厚あり、背
褐色、糙革あり、冬を経る枯もせ 本和 石韋 和名以波乃加波一名以波々佐

いそぬいろ

肥前 俗

介名、せの
下ゆ注を

いそぬいろ

播磨 俗

介名、上ゆ
同ト

いそぬいろ

山居のさまゆき巖の立並びたるを門戸
小見ありたるあり 松の戸山櫻戸の類あり

月清下 月清下 戸小今も松風庭まらふあり

いそぬいろ

巖の間とゆ 新六 松たてる巖のまじり
のむらむら いそぬいろ の苔あり いそぬいろ

いそぬいろ

伯耆 俗

草名、まんねん
ぐさの雄種

いそぬいろ

巖間小同ト 万 浪の上とゆ いそぬいろ

いそぬいろ

いそぬいろ 新六 いそぬいろ いそぬいろ

いそぬいろ

石橋あり、浅瀬石を置並、其上を踏む
るものあり 万 いそぬいろ いそぬいろ

かきつせ小石橋 拾遺 雜質 いそぬいろ いそぬいろ

いそぬいろ

いそぬいろ

しむはげしめ

同裏書弓場始次第時刻
出御御座神御神鞋注

射場殿ゆく弓を射くしむるなり江次九射
場始前月十日雲圖抄十月五日射場始前月十日

しむはげしめの

万四石走万四石走かた君小戀万四石走又十石
走間万四石走かた花の又二石走万四石走かたの

國の○の石走の下の條と文字の同しけきと意も訓も異ありゆづり
浅き川より石を並べおぼく其石を踏渡りゆづり故に其石と石との間の
近きとて間近きの枕詞とて間々の其あはるる石の間々と云つげあり
淡海とつげし其石のあはるるゆづり万葉集十一巻ゆづりあり
川明日もさそん石走遠心いおもやそぬもとある石走の下の間近くし
るとゆづりゆづり意とあはるるゆづり同意あるなり又十三巻石走甘南山
みしるるる語をゆづり石走の並と
ゆづりゆづりあり

しむはげしめる

万六石走万六石走かたあがゆづり泊瀬河又十五伊波
婆之流たきもとるゆづり又三石走たる水の水

を○たぎちの龍ちゆく龍の用言あり石走の巖走よ龍の巖小激か
さまをもち枕詞ゆづりあり垂水の攝津の地名あはる垂流る水の意ゆ
ゆづりゆづりあり

しむはげしめる

石のゆく水をゆく流るるを
ゆづりゆづり證歌上よるる

しむはげしめる

神を祭る人をゆづり
神代紀下齋主此西甲

しむはげしめる

ゆづりゆづり體言源初音年の内のゆづりゆづり
ゆづりゆづり又初音ゆづりゆづりゆづり

ゆづりゆづりゆづりゆづりゆづり
ゆづりゆづりゆづりゆづりゆづり

しむはげしめる

徳と須或い壽てよむ歌あり古今序ゆづり
歌のさま六あり云云六ゆづりゆづり

しむはげしめる

武家元服の時調ぶる甲冑をゆづり
普廣院元服記御祝具足

しむはげしめる

ゆづりゆづり意同ト万錦綾の
中々裏める齋思毛妹小ちちめや

しむはげしめる

祝ひまをゆづり晴中晴中ゆづりゆづり
あきまをゆづりゆづりゆづり

君かたのうらふ月をわづらふあはるるゆづり
あきまをゆづりゆづりゆづり

しむはげしめる

神木とゆづり忌ひわく槻をゆづり万土天飛や
輕のやゆづりゆづり齋槻ゆづりゆづり

めつづま

しんひつま

しんひつま 俗。めつづま

生葉の一柄上小數
極を高く尺許

しんひつま

しんひぬ

しんひのかぐ

吾兒視此寶鏡當猶視吾
與同床共殿以為齋鏡

しんひのつゑ

しんひの杖の音あど有る夫
龜山のよのふ行々するあどありける

しんひのみくら

しんひのま ○しんま

興齋宮于五十鈴川上神功紀是以命群臣及百寮以解罪改過更造齋宮
於小山田邑古拾仍隨神教立其祠於伊勢國五十鈴川上因興齋宮命倭
姬命居焉八雲御抄齋宮は宮
藻玉齋宮云云しんま

しんひご

しんひびと

忌人而仕
奉也

しんひべ

鏢坂上則卒精兵進登那羅山而軍之方三あふとく
つげさ齋戸をいひわるとる名竹玉をまひあきたま

しんひあつ

カリル

崇神紀時得神語隨教祭祀

かたは愛するつづまをいふカセあふとくひきの山
つづまをいふハハカをいふとくまの君が伊波比孀も
草名日光山小産する羊齒あふとく形稍蛇
眼草小似たり根指大ゆして石上小蔓

神とあつる殿あり

北山史途巖殿

しんひのぬ 同ト神代紀下是時

齋ひ敬ふ鏡の意あり神代紀下吾兒視此
寶鏡當猶視吾可與同床共殿以為齋鏡古拾

卯杖の下小注を杖
しんひは紙よ山よむらの響とたうぬら

幣帛ハ神小奉るものあまの齋ひとりの
天武紀下祭幣諸社又祭幣帛於相新嘗諸神祇

神と齋ひあつる宮をいふつづまのま意同
ト垂仁紀故隨大神教其祠立於伊勢國因
草名しんまの下小注を以字巻柏
尺素往來山菅山橘苔松巖檜

神小仕奉る人をいひ齋の下見合ま
記中是以汝命為上治天下僕者扶汝命為

神小奉る酒をいふ具をいふしんひの忌人の
下小注を崇神紀爰以忌氣鎮座於和耳武

つづまをいふ神をいふあ

しんひや

合戦の始ふ互に矢を射りて式あり
矢を射りて一矢を射りて式あり
其廂人先忌矢可彈

しんひもの

ハロカヘ
造りしもの下注云ハ雲御抄神殿
つゝ神とありしをいふありしをいふ
むと本同言ゆき諸の事機事なりと

忌避て萬と慎むを
りく〇齋

ハロカヘ

ハロカヘ

万九
神樂歌さうた葉ふゆき
む夫行水のうへふさる河社
下心ひら田とゆきわく世ふ
神の守護一給ふとあり
やまこの國のつらゆき

しんひ

ハロカヘ

のつらゆき
真わらぬき此吾子をわく國へ
祝言はるをいふあり
君をわめい人をいふあり

しんひ

あぞ君をいふひつる千とせのかけ
明月記今年以後吉慶之先表祝籠之
草名虎耳草の一種あり葉大ありて
の如く面裏ともい緑ありて毛あり花小

しんひ

く穂長大あり
く枝あり

しんひ

しんひ

俗にひめあぢあぢ
岩のある湖あり
高さ一二尺葉藤に似たり
夏月葉

間中花穂を出し藤に似たり
花を開く又白花もあり〇胡豆

しんひ

神代小神たちの乗給ひし舟
ひまわりの天のまきめが石船の海高津

あむくふらうらうらう 又十九 あむきの島やまとの國と天雲小磐船うけく 紀竟宴歌
久多利古志阿麻能伊波布祢伊波比古美也波志咩留志流幣難理氣利
石の大地あるものなり 古今賀 しが君ハち
よゆやちよ小きまき石ののりやとありてま

和巖 保八

いしやまび

わらのひと
まら

いしや

いしやん 丹波 俗

いしやーぶと

いしやつ 伊豫 俗
讃岐

いしやわん 沢山 俗

巖間小生ぶる麦門冬 万 見
一のまじりの山の石穂管孫もごうまわ

巖の間あり 金葉 春 うらあびん春ハ來まけ
う山川のいしやの氷まらやとらら

草名、ちん孫んぶとの
下小注ま

將言事と同一意あり 源 貝 けける
かひあれやたがのまらーぶとまら

草名、いしやまの
下小注ま

いしやまをいしやまあり 後撰 意 ちんかまあり
せうきたる山水のいしやまやーくもあまらゆる

かちの紫式部日記「まらつうふ人のめゆまかう心ゆつむ、まら、
人の中ゆまらうら、いしやわん死くとも侍まら」

いしやめ 播磨 俗

いしやめ 俗

いしやせんまら 俗

揺と者
あり

いしやのあぶがれ 俗 果名、牛心柿の一種ゆて、形最小
あぶがれ 石見の名産あり ○鹿心柿

いしやん

いしや 石見の國より出る綿あり
主計式 石見綿十兩

いしや 物の充滿する
意あり
物のまらあむを
いしやあり

神武紀 僕有兄磯城軍布滿於磐余邑 神功紀 引軍更返屯住吉
推古紀 是時火雨河水漂蕩滿于宮庭 欽明紀 亮滿

いそやのやら

あらのせいの
いそや

巖の洞を家とありたるをいふ月清四あけ
ぬき露とさるいそやゆらうらうらトのいそやの

いそゆら

所謂レ被言の意ありレ記上其所謂黄泉
比良坂者宇藤藤原うたてものたふみ哉いん

ゆるあて宮ぞか又吹上とやうく見給ひ一小のこゆる西方浄土よ生れ
たるやうめ源紅梅あふれ光る源氏のいそゆる御さめりの大將あどふあ
せ後拾序いそゆる大中臣よのふ清原
元輔源順紀時文坂上望城等こあり

いそゆる

馬のあゆるいそ後拾 春上あゆるのいそゆる
のまゆるののいそゆるの冬たらあらひ駒ぞいそ

ゆる夫吹吹うらやきこののべの草ま風ゆるいそゆる
春駒の和和嘶波波馬鳴也

いそよもぎ

草名ひきよもぎの下小
宇蘭蓬類也蒿也伊波與
年支又加良與毛支

いそら

薔薇類の總名らのいそらの下注を
刺ある木すの木の刺を
いふ慶節荆棘

いそら

いそらの下注を

いそらがひ俗

介名あゆるいそひの
下注を

いそらげうごん俗

麦麩極て細く切
たるのあり

いそらあやうび俗

草名さうびの
下注を

いそらむせ丹波 俗

草名あゆるいそひの
下注を

いそらふ川田 俗

射て敵を拂ふをいふあり宇拾うてか
くいそらひととりすあらせく候いつるあり

いそらむせん俗

木名かういそら
の下注を

いそらん土佐 俗

草名ふうらんの
下注を

いそらん俗

草名こてらんの
の下注を

いそり俗

ゆらりの下小
注を○尿

いそる俗 刈りぬ

威をあらはすを
いふあり

いとま

うちぞら
かりける

いとまあり

刊
刊

べんあり [又] 近代節會あどゆも、上達部物らぬいそ色
あは事、古きゆあまゆべん由沙汰ありけるよ

いとまぬこ

たあまあまありやんやんぬ
こことち給ひそ

いとまぬもの

波伊婆物
阿礼夜

いとまんげ

あり ○石蓮花

いとまの體言ゆて由緒の意あり [山家] 下
花もまぶここのりもまもあまもここのり

由緒ありとりふ意あり [著] 汝が恨所の
もあはまあまも、先世のむらもま

謂もあは事の意あり [竹] 國王のおわせごと
とあま世ゆまも給もん人の、うけたまう

言ゆ不豆とりふ意あり人よもひたてら
まぬとりふあり [續紀] 十七 男 雄 父名 負 五 姓

草名、昨葉何草の一種、葉潤くして尖らば、
粉白色と帯び、其形千葉蓮花の如きもの

いとろくまわう

いとま

いとる

水あかびらつーつ [源] 柳 年らまここのり
とやるとまはし人らびのあせも行らま

いとるづら

古名とまべー、然もここのり強く一條ゆあまも [万] 十四
の伊波為都良ひらぬまここのりま [又] かのつけぬまやま
あまなたえと給

いとま

許、形色鷓鴣
心美あり

いひ

板あま箱の如く作り地小埋め置き水を
出納まべた所とら [拾遺] 雜意とまかこ

石名、あまの
下注ま

巖の行めらりたる所を云 [新] 六三 山川のあま
りの水る巖まら流まゆままをあくなる
巖間より出る水を井とあたるを云 [山家] 下
何とあまここのりまびらまららまらまら

古説詳あまここのりま、今伯耆ゆまら
いとると唱まを以て、姑らまらまらひの

鳥名とらまらまらまら、最小あるものあり、
背上の色緑色胸小月形まらまら、長さ八寸

いひよあさきよ池水のふるさあきとたきとあふべき後拾雜四鳥もあふ
こよふゆらんかひの池の跡和械

いひ ○かー○ぶと○さう○おざい○だん ○おせん ○おせん ○さまう
○やまら ○さう ○おんま ○さう ○おあう ○おざい

ののこらふ後世の米と煮るなりかうの下の見合まべー○飯神代紀下用
淳浪田稻為飯嘗之推古紀斯那提流箇多烏箇夜摩尔伊比尔惠互方
家小あまの筈小盛飯と草枕旅ゆーあまの推の葉小もる竹大炊つらさ
の飯かー屋のむね小宇いひ四石なるりさまのきのひの

いひ ののの體言繼體紀但重其心蓋荒籠譯乎
榮後拾雜御うやあどのわりのいとわさうー

かうーかどさきとらうのひのあさきせ
給ひーやまのさう御さうあう

いび 中古らねまの古名ありとせ然まらぬ
未だ詳あらぬ和鷓鴣伊和名

いひあぶら 下より上へ申あり月詣集平貞能あぶらの
かさづのちさうさうけり入道わりのまら

いひあぶら 物を考へていひあつるあり枕あふり
いひあて御覽せせん源木をさるわら

いひあぶらのかきもたひひる事とあふ
さあぶのここといひあげ侍りけるか

いひあつる 人と互小物のいあはるるをいふあり後拾雜三
いひあつる小ありある人のさうもあふりいあ

いひあつる 又若葉かさむいひあはるるをいふあり
互小のいあふあり源洋舟をさるいあふり
あまらわらる水小侍りと人々もいあふり

いひあつる 物いひあやまつるいふあり枕歌あどのい
いひあやまつるむりこことよびへさあ

いひあつる 虫名、蟻の一種ゆて多く庭中小棲む長さ
一分許ゆて赤く微黒色と帯ぶ○黄蟻

いひあふ 濱松二らう二いふ
いひあひさう

いひあやまつ 物いひあやまつるいふあり枕歌あどのい
いひあやまつるむりこことよびへさあ

いひあう 和 赤蟻和名伊比阿里
いひあひさう

いひあう 物言出はあり古今春上かくさうく小なるんや
いひあうといひ出さう侍りける新續古意

いひあう 物言出はあり古今春上かくさうく小なるんや
いひあうといひ出さう侍りける新續古意

いひあう 物言出はあり古今春上かくさうく小なるんや
いひあうといひ出さう侍りける新續古意

いひか〜

カシコセ

いひかひ

隣の家小あや〜死賤の男の聲々云々北どの
ろと聞給ふやあどひひろりも聞也

いひうひ

○あざいひ
○あざいひ

飯を罷小移〜盛ヒあん〜伊ての〜ひひひ
と〜宇まで宮のひひひを坊小とりつ〜
さうかの〜さひひひ〜あひひひ〜
薬匙小似らる物小あ〜其形坊小似らり其圖厨事類記小見也

いひか〜

カシコセ

あ〜その〜あ〜死事小ひひ〜
身小あ〜思ひの〜あ〜あ〜
あ〜云々あ〜
と〜を〜奉る

いひが〜

嚙湯坐几諸部備
行以奉養焉

赤子小飯を嚙て含る人〜
云彦火々出見算取婦人爲乳母湯母及飯

いびき

〜あせ〜人のいびき
あ〜字軒伊比

寐りたの〜き〜あり
あ〜いびき〜き〜あ〜ぬ音〜枕〜

いひきうせ

だちゆいりひきうせ〜
繪所のか〜め〜此歌の〜ひきうせ〜
又蓬生 あまあ〜げある詞どもひきうせの〜
家長日記

いひぎら

俗たれせんごん
あんでん

木名葉梓小似く畧長く圓ゆ〜先き尖る
春月小白花を開き實を結ぶ南天の如く

紅熟す
○椅

いひき

カシコセ

句句〜ひきうてあ〜句々相連〜
き〜あ〜可為秀逸也
源 洋舟 右近ハハひき
八雲一言記和歌ハ五

いひら〜

あげ〜むい〜あ〜
いひら〜あ〜あ〜
いひら〜あ〜あ〜
枕四 きた

いひくさ(俗)

加知知也

言べれ種

ちり

いひくたま

他をわらうもの物りふあり枕ニ昔物語あど

たーあどま

いひくろめる(俗)

加知知也

悪くさうとてよれさすふ
りひあまをりふあり

いひけ

木の棧ツツの蓋ふれ器ツツで飯ツツのきあり宇春日詣

いひけつ

加知知也

他の事ツツのいひ

いひけつ

加知知也

人ツツのいひツツをツツと

源帝本 ひろ源氏名のところへうりひたれま給ふ落窪ニりまぎまのころが
心ゆもりらむやちまらむかきりゆおまもまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき
つる○此のいひまらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき
けつの敬語あり

言けるの延言あり記上欺海和迹言土佐
そがりひけらるる古今旅まらむのいひまらむかき

てあまの川原源よりまらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき

いひごと

言事イヒガサとりのわ同ド大鏡その
ころのいひまらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき

のらひごと

いひまらむ

のをらひいとぬあり後撰りひまらむかき
とぬのらむある池水の浪りつとふねもひ

いひまらむ

よかぬらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき
あがら小きをわりの事りひまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき

いひまらむ

かのあま君おまらちあま

いひまらむ

他小のをりひのへてまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき
源源あやとらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき

いひまらむ

其事をりひたてまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき
川小まらむかきまらむかきまらむかきまらむかきまらむかき

ひひらひら カレシセ

ひひらひら カレシセ

ひひらひら カレシセ

ひひらひら カレシセ

事申、天の下ひひらひら カレシセ

ひひべた 俗

ひひが カレシセ

ひひが カレシセ

ひひちどく 俗

ひひらひら 今昔 此女の童申此の由をひひ合て 平家 ちうのりとうりとあひへど

世間へひひらひら カレシセ

人ふらふ常中ひひらひら カレシセ 狭 カレシセ 今古のひひらひら カレシセ 言辭の拙きと

飯の粒あり 記中 飯の粒為餅釣其河之年魚 和 其事をまぎらち 源 右近の

ひひらひら カレシセ

ひひがむ

ひひがめ

ひひまはらひら

たてまつり 又 カレシセ

ひひまはらひら 俗

ひひまはらひら カレシセ

くひひまはらひら カレシセ

ひひもらひら

人のひひもら カレシセ

ひひやぶら

虫名ひひがむ カレシセ

ひひがの カレシセ

其事をまぎらち 源 右近の

よれ カレシセ

詞た 源 世の人

つめる事 源 世の人

他のひひ 源 給ひて例の

給へり

ひやむ

ひやむ

ひやむ

車よまするわぢゆわぢゆひやむ伊常の使よりいよくりのさきとひやむひき
は續後拾衣 朝夕ゆきたまのさかのききたるひやむかきあはれさか

ひよる

よらひとわぢゆわぢゆひやむひきあが
さむとさむとさむとさむとさむと

びる

ひら

ひら

ののらひやむをりふあり枕七さのけさ
つどひ物あどりふあまもより参るを見てひ

書ゆもあき傳言ゆもあき他ゆりひつるを
をりふあり万言將遣まきとまゆと晴上

ののらひけ親とよるあり源帚木
きつりゆりひより侍り又赤梅花物やひ

煩々々々々々
いふあり

其事實を言するさる宇後藤我領する
きりぐと多かきとたきりひり人あむ
事實をこけてりふあり源手習た侍従も
きとく尼君のこり人あむりけるふらうを

ののらひの御かゆひひきけさ
あむとさむとさむとさむとさむと

ひら

ひら

あとのらひ

ひら

絶々御返りあり源東屋かよひ
たさとのとゆんぢゆひひひひひひ

ひら

ひら
かきあく心ちひらひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひひひひひ

ひら

ひら
ひひひひひひひひひひひひひひひひ

言事の義ゆいヒゴトあり為忠集数あり
ぬうれ身の上やとさむとさむとさむと

年月をさるてさるさるさるさるさるさる
落窪日々ゆあゆ絶々のひひひひひひ

言煩ふゆくのひゆくあり後撰
らひくやまゆける人ゆ源蓬生ささささささ

言倦るゆくのひゆめる意あり源手習
ちかてささささささささささささささ

いんむら (俗)

蜜蜂の人家あき畜ひ
置りのむら

いんむら (カハムラト
カヒムラト)

鳥名野鴿の家子畜へるもの大さ八九寸頸
短く胸隆く足短く羽色數十品ありといふ

とも藍紫色の者を尋常とせ (源タ息) 竹の中ありてをとりて鳥のふつつかあきとさき給て

いんびと

家子仕ふる人をいんびと轉して貴人の家子出
入ふる人をいんびと (源開屋) むらりのやうふらと

あきむらと猶ちかた家人の内ありかき給ひたり
順集 家人の詩作り歌よむあきむら侍り

いんむら

家のむらがりてある處をいんむら (記下) 波途布邪
迦和賀多知美禮婆迦藝滿肥能毛由派伊

幣年良都麻賀伊
幣能阿多理

いんむら

家造りして居るをいんむら (貫之集) 山風
香をたぐねてや梅の花うわつちとわつち

いんむら
けむ

五百をいんむら万葉集に五百入鉈漆五百入爲
而かと借字不用のさう (神代紀上) 又背眉千

いや

箭之鞆與五百
箭之鞆

いざ (俗)

病名のいざの
下小注也

いざ 陸前仙臺 (俗)

魚名のいざの
下小注也

いざい (俗)

石名のいざいの
下小注也

いざう (俗)

鳥名さやつねざりの
下小注也

いざうざり

虫名のいざむらぎの下小
注也 (以字) 螳螂 (イザウ)

いざえ

五百枝あき木の枝の茂くさうたを云ふ
神名備山五百枝刺繁生有都賀乃樹乃

いざえ (枕詞)

大神宮儀式帳 五百枝刺竹田乃國 ○竹田の
伊勢小あき地名あり古郡郷をいざえとせ

國とのけり竹の枝の繁く刺りの
あきから此枕詞をあきり

いざね (俗)

草名えびの
下小注也

いづく (音)

常の異ある木をいづく雑令凡知山澤有異

いづくさ (俗) ○あいのささき ○いづくささき

寶異木謂異寶馬腦虎魄之類也異草名水邊の生る全形鴨跡草に似る細長

似たり ○水竹葉

夏月枝梢毎に小き淡紫花を開く三瓣の

いづくひ (相摸俗)

虫名のいづくひいづくひ

いづくた (俗)

鳥名のいづくひ

いづくさ (陸奥津輕俗)

虫名のいづくひいづくひ

いづくま (加シスセ)

菴をたつるゆてきまのかりその小造るをいづく新古秋の田のいづくま

三月とてのゆやまり

いづくり

虫名のいづくひいづくひの下小注を堤中納言物語いづくひ

さうぐいすといづくりいづくり

いづくろ

五百代小田あり代より田をかぞふゆめく

あうとあうせ五百代小田をかりとせたり

いづくせ (俗)

魚名のいづくひいづくひ

いづくた (俗) ○とまべり ○とまあり

水蠟燭の生る虫の巣なり状白粉の如く

虫白蠟と

いづくた (俗) ○とまべり ○とまあり

木名高さ三四尺より丈餘小至る葉楕圓の

て開く實圓長女貞の實小

いづくたけ ○いづくたけ

玉蕈の類あり一類に叢生を其未だ成

故小此名あり

いづくた (俗) ○いづくせ ○いづくせ ○あめのとまひ ○あま

魚名鯧魚の類あり

類聚往来 疔草

いづく

〇五十

〇三十一

いやよ

五百夜あり 万あめ小せつれよとと

いやよろづ

すひせむとよひのあさ五百夜つぎこそ

いぢゆひ

俗。いぢゆひ

五百万なり 万十三五百万千万神之

いぢらん

土佐 俗

神代よりいひつぎ來たる

いぢり

結び様の名あり繩紐等中小先を出し厨

かきわしせむあまのつちのうへ小廬なるかも 伊いぢりあやれあまの

たをさいあやたの心我まじ里小聲一たえむ 源年頃だ小同トのぢり

いぢり

雲霧といふ俗小煙あどの イブルと云と同く

祝詞式大祝高山之伊穗理短山之

いぢり

て物のおぢり小明らうたうさうより云あり

いぢる

列明州

菴とたててそのうちへ入り居るといふ 万

まじりるが袂と

いぢる

いぢり小

おもやあさかも

同ト

語彙卷九

吾彙卷九

いぢ

